



人の良さは、気づきと関わりの中で輝く

校長 土屋 智樹

先日のドレミファカーニバルでは、子どもたちが見せてくれた姿に心から感動しました。本番の演奏はもちろん、その裏で積み重ねた練習や、仲間を支える姿にこそ、子どもたちの成長があります。実行委員として会を支えた子、楽器の音をそろえるために何度も練習をした子、それぞれの努力が一つになって、あの舞台が生まれました。

教育の場でよく耳にする言葉があります。「子どもたちの見えない可能性を引き出すことが大切」。確かに、その通りだと思います。でも、ふと考えるのです。見えないものを、本当に引き出せるのでしょうか。私たちは、どんな方法でその可能性に光を当てることができるのでしょうか。この問いに、私は日々向き合っています。

人の良さを引き出すことは、簡単ではありません。毎年、ドレミファカーニバルの終わりに、各学年の演奏で良かった点や頑張りを伝えていますが、言葉選びに迷い、「本当に私の気持ちは伝わったのだろうか」と思うことがあります。認めることは大切だと分かっているけど、子どもたちの努力に気づけない自分もいます。だからこそ、良さを引き出すには、私たち自身が「気づこうとする力」を持つことが必要なのだと思います。そして、その良さは一人で完結するものではなく、関係性の中で育つものだと感じています。

では、どうすれば見えない可能性を引き出せるのでしょうか。私は、三つの視点が鍵になると考えています。

一つ目は、小さな変化に気づく力です。劇的な成果ではなく、日々の小さな努力や変化に目を向けること。例えば、ドレミファカーニバルの練習で、前より少しでも音がそろった瞬間や、仲間に声をかける姿。それは、見えない可能性が形になり始めた証です。

二つ目は、問いかけで本人が気づくことです。「あなたが頑張ったことは何？」と尋ねることで、子ども自身が自分の努力や成長に気づきます。問いかけは、教師が答えを与えるのではなく、子どもが自分の中にある良さをを見つけるきっかけになります。

三つ目は、認め合うことのできる関係性です。良さは、仲間や教師との関わりの中で輝きます。誰かに「ありがとう」「すごいね」と言われることで、自分の価値を実感し、さらに挑戦しようという気持ちが生まれます。ドレミファカーニバルの舞台裏で、楽器を運ぶ子や進行を支える子の姿に「助かったよ」と声をかけること。それが、見えない可能性を引き出す一歩になるのです。

子どもたちの見えない可能性は、私たち大人や本人の「気づき」と周りとの「関わり」の中で輝きます。学校だけでなく、御家庭でも、ぜひ小さな努力や変化に目を向け、言葉で伝えてみてください。「前よりできたね」「頑張っていたね」という一言が、子どもたちの自信を育てます。私たちも、学校でその一歩を大切にしていきたいと思います。